

GERDに対する内視鏡治療研究会 研究成果報告

摂津診療所 竹内 利寿

本研究会は日本消化器内視鏡学会の附置研究会として、2023年度から2025年度にかけて計3回開催した。ここでこれまでの内容を総括し報告する。

GERDに対する内視鏡治療が2022年に「内視鏡的逆流防止粘膜切除術」として保険適用となったことを契機に研究会を立ち上げ、本治療の普及と内視鏡治療のいろんな課題解決を目的とした。

GERDの治療は薬物治療が基本であり、多くの症例で粘膜傷害および症状のコントロールが可能となっているが、一部薬物治療抵抗性も存在する。このような薬物治療抵抗性GERDの標準治療は外科手術であるものの、欧米からは様々な機構のデバイスを含む経口内視鏡治療法が開発されており、また本邦からもESD/EMRの手技を応用した内視鏡治療法が提案されているが一般的に広く普及はしていない。本研究会では現状各施設でどのような内視鏡治療が行われているか認識するために、第1回では4題、第2回では5題、第3回では4題の症例提示を行った。またARMS/ARMA/ARMP法、ESD-G法、海外での内視鏡治療法（外科治療法も含めて）を総括し、GERDに対する内視鏡治療手技への理解を深めた。

一方、GERDに対する内視鏡治療を行う上で、その適応も課題である。機能性胸やけに内視鏡治療を行うと、症状の改善が得られないばかりか症状が悪化する可能性もある。機能性胸やけなど他疾患の鑑別には逆流モニタリングやHRMが有用であり、これら機能検査を踏まえた内視鏡治療の適応を検討した。

本研究会での知見をもとに「難治性胃食道逆流症患者に対する内視鏡的胃食道逆流防止術の手技の適正化と適応に関する観察研究」が進行しており、今後報告する予定である。

本研究会がGERDに対する内視鏡治療への一定の理解と普及への一助となったと考える。